

# 蔵骨器を伴う中世火葬墓の一例

## —大仙市水木田遺跡出土の事例から—

高橋 学\*

### はじめに

ここに紹介する資料は、大仙市〔旧中仙町〕中仙公民館長野分館が所蔵する須恵器系陶器の小壺と片口鉢（搗鉢）である。これら陶器の出自は、大仙市〔旧中仙町〕長戸呂字柳原在住の佐々木チヨさんが1959年5月16日、長野公民館（当時）資料室に持参したことを端緒とする。陶器出土の経緯・状況は、聞き取り調査を行った藤田秀司氏により、次のように記録された。<sup>(註1)</sup>

1958年秋、「自家の牛蒡畑<sup>ごぼう</sup>を掘っていたところ地下約1m位のところから出た事、下には川原石が敷きつめられていた事、甕には搗鉢状の蓋がかぶさっていた事、中には3分の1くらい木炭が入っていたが、死体の骨を入れた骨壺ではないかなどという人もあったので流れに入れて洗ってから持ってきた」。

牛蒡畑の位置は、佐々木さん宅の北東側約400mの大仙市〔旧大曲市〕四ツ屋字水木田地内である。

筆者も2004年12月、佐々木さん宅を訪れ、聞き取りを行った。それによると、「川原石は一辺25cm前後であり、何個か掘り上げた。焼物（片口鉢）も当初は石だと思い、落として割ってしまった（現在接合してあるが、3片に割れている）。その後、慎重に掘ったところ、鉢の直下から壺が見つかった」。<sup>(註2)</sup>

本陶器は、『経甕』として大仙市〔旧中仙町〕の文化財指定（1993年3月30日付け）を受けているが、筆者が担当した大仙市払田柵跡第117次調査区での類似事例の検出を契機として、水木田の陶器が火葬墓の蔵骨器ではないかと推測されるに至った。小稿では陶器の資料紹介と共に、出土類例を踏まえ、当該陶器を通して見えてくる中世火葬墓の一端について言及したい。<sup>(註3)</sup>

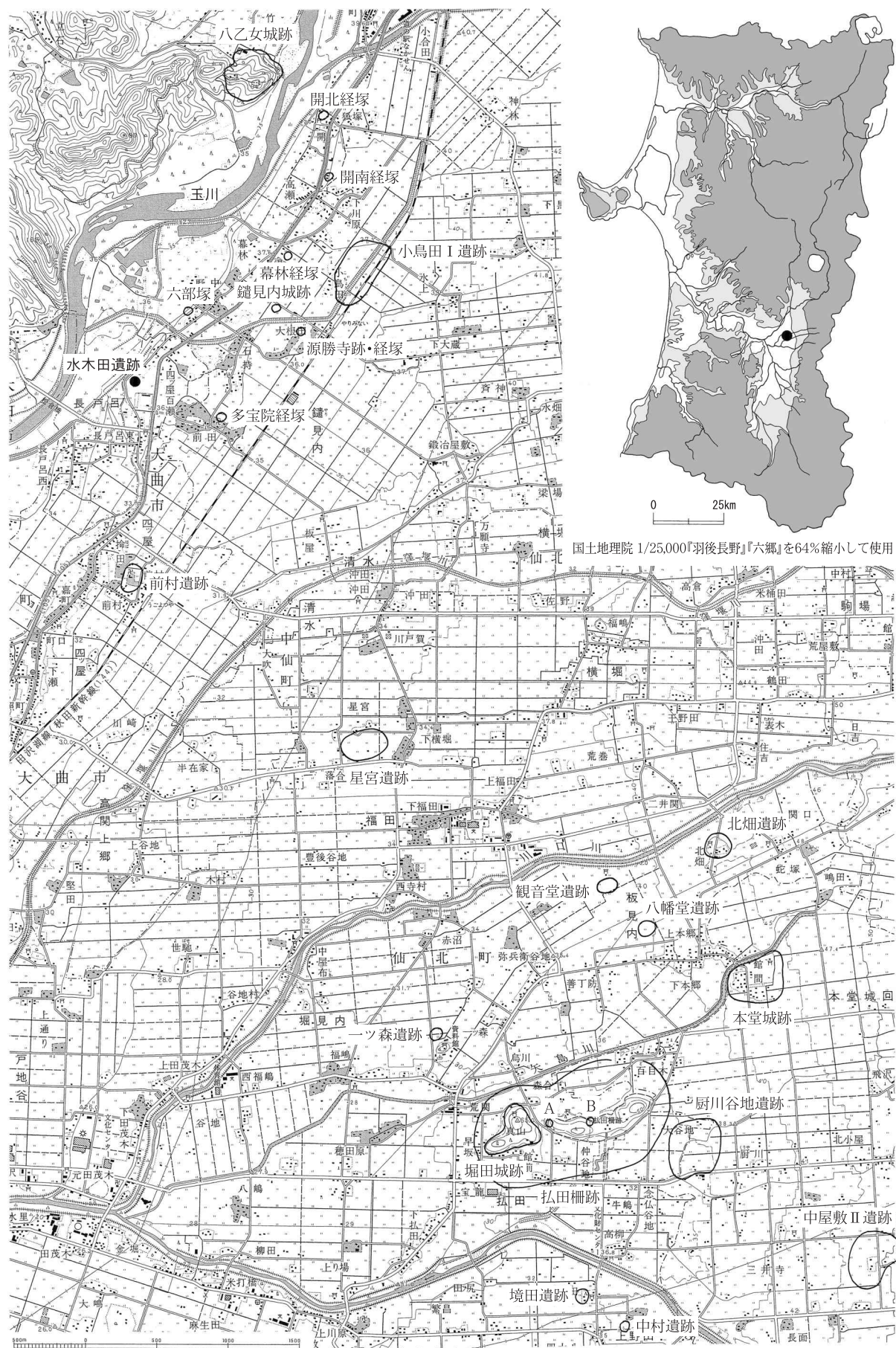
### 1 出土地点の位置・立地と周辺の中世遺跡

陶器の出土した水木田地区は、横手盆地の北部である旧大曲市域の北東端に位置し、旧中仙町長戸呂地区と近接する。両地区は、南北に走る旧国道105号線（近世：角館街道）と西に向かう県道四ツ屋神岡線（県道67号線）が交差するところであり、雄物川の支流である玉川左岸域の自然堤防上（沖積低地）に立地する。<sup>(註4)</sup> 標高は約34mである。

水木田近辺における中世遺跡は、城館跡として八乙女城跡（大仙市長野）や前村館跡（大仙市四ツ屋）が周知されるものの、時期・館主・由来等は不明確である。また旧中仙町域では、小鳥田Ⅰ遺跡<sup>(註5)</sup>（大仙市鍵見内）、旧仙北町域では、払田柵跡長森丘陵部（第1図A・B地区）、堀田城跡（大仙市払田）<sup>(註6)</sup>、星宮遺跡（大仙市横堀）、中村遺跡（大仙市上野田）<sup>(註7)</sup>、一ツ森遺跡（大仙市板見内）<sup>(註8)</sup>、旧千畑町域では中屋敷Ⅱ遺跡（美郷町土崎）<sup>(註9)</sup>などで中世陶磁器が出土あるいは採集が報じられている。

一方、水木田の南西側約2.5kmの大仙市〔旧大曲市〕新谷地字了徳（近世：新谷地村了徳）の玉川縁では、銭貨が出土したとの記録を菅江真澄が残している。<sup>(註10)</sup>

\* 秋田県教育庁払田柵跡調査事務所主任学芸主事(兼)調査班長



第1図 遺跡の位置と周辺の中・近世遺跡

## 2 出土陶器の概要

### (1) 小壺 (第2図1)

1はロクロ使用の小壺であり、底部のみが底抜け状態で欠落している。法量は口径9.2cm、頸部径8.0cm（内法径6.5cm）、最大径17.4cm、残存高19.0cm。器厚は体部最下位で1.8cm、中位で1.2～1.5cm、口縁部では0.7cm程である。

底部欠落は内面からの意図的な強い打撃に因るものと観察される。壺の最大径は、体部中央よりやや上となり、重心の位置が高くなる。頸部～口縁部は肩部より緩く外反しながら立ち上がり、口縁上部は丸味をもった嘴頭を呈する。内面肩部には粘土紐の接合痕跡が明瞭に残り、壺が二段成形であることを物語る。器面は、全体的にはロクロ調整により平滑に仕上げられているが、外面体部下半には横位のケズリが加わる。胎土は緻密、焼成良好であり、色調は灰～灰黄色を呈する。

体下部には寄贈時と見られる紙ラベルが貼付されている（第3図1b）。ラベルには、4行にわたり「陶壺／長戸呂 佐々木チヨ寄贈／発掘 四ッ屋字水木田畑／S.34.5.15」（／は改行）と記されている。

本例は吉岡康暢による型式分類では壺R種B類の無耳素文の長胴壺<sup>(註11)</sup>に当てはまる。

### (2) 片口鉢 (第2図2)

2の片口鉢は完形である。法量は口径29.8cm、底径12.2cm、器高13.1cm。器厚は体部中位で1.0cm前後、口縁部では0.7cm程である。

底部には静止糸切り痕跡を留める。その外縁辺には篋状工具による幅1.5cm程のケズリ調整が一周し、切り離し痕を消失させている。体部は底部からいくらか内傾気味に立ち上がり、口縁上部（口唇外面）は面取りによる調整がなされ方頭状を呈する。注口は指2本分ほどの幅で外方に引き出される。注口外面両脇と下部には指頭による浅い圧痕が残る。内面には、櫛歯工具による直線的な卸目が8単位施文される。1単位の工具幅は2.3cmで、櫛歯は14本である。内面体部中位以下には器使用に伴う磨耗痕が顕著に観察され、ここでは卸目が完全に滅失している。胎土は緻密、焼成良好である。色調は灰～灰青色を呈し、内面全体に胡麻塩状の薄い白灰が見られる。

これら2個体の製作時期は、須恵器系陶器の編年に従えば13世紀代に収まると推測される。また小壺は、器形及び胎土の状況から、珠洲Ⅱ期相当とされる大仙市〔旧南外村〕大畑窯跡群産<sup>(註12)</sup>の可能性はある。

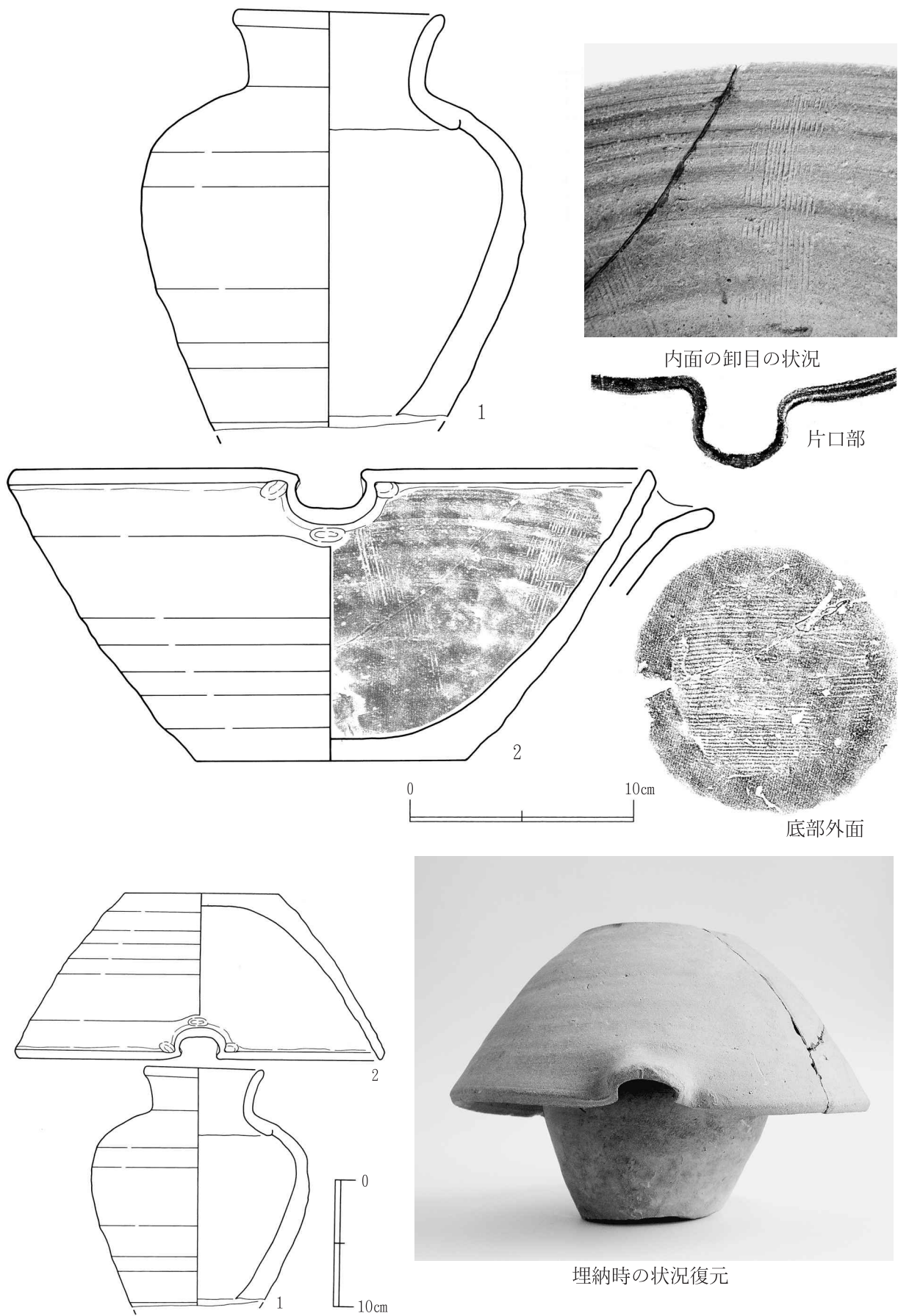
## 3 出土陶器の位置づけ

水木田地内より不時発見された陶器2個体は、経塚に伴う埋納物である経容器ではなく、火葬骨を収めた蔵骨器と推測した。その理由は小壺の底部欠落にある。一般に経容器は底部穿孔もしくは底抜けの状態<sup>(註13)</sup>で使用する事例はなく、逆に蔵骨器はある程度の頻度で認められるからである。

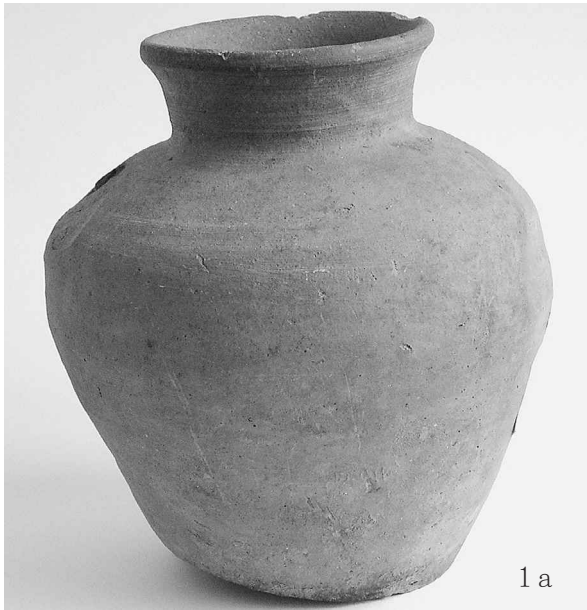
### (1) 底部穿孔の蔵骨器

蔵骨器に穿孔を施す目的は、実用的な防湿・排水あるいは信仰的な意図が考えられるが、現在では、両者それぞれと考えざるを得ない事例が確認されることから、「もはや二者択一的な議論を重ねることは生産的でなくなっている」<sup>(註14)</sup>ようである。

水木田と同様に蔵骨器とされる須恵器系陶器に穿孔が見られるのは、東北地方では山形県酒田市城



第2図 遺物(1)



1 b : 底部が見事に打ち抜かれている様子が観察される



縮尺 1 : 約 1 / 2.5  
2 : 約 1 / 3

第3図 遺物(2)

輪柵跡で出土した四耳壺（12世紀後半）の1例である。<sup>(註15)</sup>

また古代の蔵骨器に穿孔が見られる事例は、秋田県2例、山形県2例、岩手県1例が報告される。

秋田県では、大仙市〔南外村〕小出Ⅰ遺跡<sup>(註16)</sup> S R 06と払田柵跡第125次調査区（真山丘陵部）S K 1689<sup>(註17)</sup>である。両例とも底抜けとさせた土師器長胴甕を倒立埋設する。時期は、小出Ⅰが10世紀前半、払田柵が10世紀前～中頃である。

山形県では、飽海郡遊佐町宮山坂墳墓群の1号墳と9号墳にある。<sup>(註18)</sup>両者とも土師器短頸壺を正立埋設している。前者は底抜け、後者は径約6cmの穿孔が見られる。時期は、9世紀後半から10世紀である。

岩手県では、胆沢郡金ヶ崎町西根遺跡に認められる。<sup>(註19)</sup>本例は土師器長胴甕を倒立埋設させている。底部には径3cm以上の穿孔がある。時期は9世紀後半から10世紀前半である。

## （2）蔵骨器の類例

水木田のように須恵器系陶器の壺を蔵骨器とし、片口鉢（播鉢）で蓋をした事例は、東北地方に限定すれば、次の5遺跡に認められる。秋田県1遺跡<sup>(註20)</sup>（①）、山形県4遺跡<sup>(註21)</sup>（②～⑤）である。

### ①払田柵跡第117次調査区（大仙市払田字長森、第1図A地点）

古代城柵官衙遺跡である払田柵跡は、9世紀初頭に創建され、10世紀後半代には終焉を迎える。しかし長森丘陵部西側は13世紀に入ると墓地として場の利用が新たに開始されることが近年明らかになってきた。それは土塁・空堀で画された区域内一墓域に墳墓（塚墓）・火葬墓が構築されることが判明したことである。墓域は丘陵部の馬背状の狭い平坦面から北側および南側緩斜面部にかけてを選地しているが、墳墓は平坦面上、火葬墓は南側緩斜面部にそれぞれ立地させている。

2基検出された墳墓のうち、1基（S X 1264、一辺5m前後の隅丸方形プラン）の盛土中央部には、完形の小壺（器高16cm）の上に口縁部～体上部を打ち欠いて皿状に加工した播鉢を被せる形で納められていた。壺内部には肉眼で骨等と見られる遺物は確認されなかったが、土壌を分析した結果、「火葬骨を埋納した可能性がある」と報告がなされた。また3基検出された火葬墓は、人骨と分析された焼骨（性別・年齢等は不明）のまとまりから、おそらく曲物（径25～30cm）を容器として埋葬されたものと推測される。

墓域の形成時期は、墳墓内や墓域内出土の陶磁器が、大畑窯跡群産と目される須恵器系陶器や同安窯系の青磁碗であることから、13世紀前半代を上限とできよう。これに確認された埋葬施設の数と陶器の伝世・使用期間を考慮したとしても、下限は13世紀代に収まると推測したい。<sup>(註22)</sup>

### ②七日台遺跡（鶴岡市田川字七日台）

遺跡は庄内平野の南西部にあたり、越後北部からの山地が庄内平野と接するところに位置する。墳墓群は標高70mの七日台丘陵尾根上にあり、10基の積石塚（1号～10号墳）が2m間隔で南北一直線状に並ぶ。壺と片口鉢がセットで出土したのは、3号墳と10号墳である。同遺跡は、『吾妻鏡』に泰衡郎従と見える田川太郎一族の墓所と推測されている。時期は12～13世紀。

### ③神社口遺跡（鶴岡市西目）

遺跡は鶴岡西方の荒倉山（西山）を主峰とする西部丘陵の東側、平野に面した一支丘、標高20数mの丘陵上に立地する。集石墓（ケルン状の石組）内から壺（T種・中壺）と播鉢がセットで出土した。時期は13世紀代。

#### ④長根遺跡（酒田市〔旧平田町〕田沢）

遺跡は最上川下流域の支流田沢川に面した丘陵上に立地する。集石墓とみられる遺構内より波状文壺と片口鉢がセットで出土した。時期は12～13世紀。

#### ⑤袋樋遺跡（鶴岡市〔旧羽黒町〕羽黒町玉川）

遺跡は羽黒山の西方、北に伸びる丘陵支脈上に立地する。集石墓（直径7m×高さ1.5m）から、壺と播鉢・浅鉢が2セット確認された。壺の内部には火葬人骨片が残っていた。同墓は、「羽黒山に密接に関係する者たちの墓であろう」とされる。時期は12～13世紀。

#### （3）小結

水木田蔵骨器の位置づけを探るために、前二項では底部穿孔と容器の組み合わせの視点で類例を抽出してみた。その結果は次のようにまとめられる。

底部穿孔の蔵骨器の使用は、古代～中世においては、岩手県西根遺跡例を除くと、横手盆地北部と山形県庄内地方に分布が偏ることが明らかとなった。また須恵器系陶器壺と片口鉢をセットとする蔵骨器もまた、横手盆地北部と庄内地方の丘陵部に立地し、時期も12～13世紀にまとまりをもつ。水木田例は、その分布域、時期において合致するものの、墓の立地が沖積低地であることが両地方例との相違点である。

なお蔵骨器を伴う事例ではないが、大仙市〔旧仙北町〕北畑の北畑遺跡では2005年の発掘調査で火葬墓を伴う中世集落が検出されている。<sup>(註23)</sup>

#### おわりに

本火葬墓が発見された水木田・長戸呂地区は、現在の行政区分上では、大仙市として一括りにされている。しかし、2005年3月までは、大曲市と中仙町に分けられていたところであり、遡って近世・近代には四ツ屋村と長戸呂村（1889年〔明治22年〕に長野村の大字となる）として独立していた。<sup>(註24)</sup>

一方、古代・中世墓の立地は、平安京や鎌倉の例を引くまでもなく、都市（町）郊外の境界部である山野（丘陵）・河原・街道脇とされる。<sup>(註25)</sup> また齊藤忠氏は、墓地としての立地の理想的な条件は、「人びとの集落地と接続せず、しかも、集落地といちじるしく隔絶していないところ」とする。<sup>(註26)</sup>

改めて本火葬墓の位置を確認すると、そこは村境の自然堤防上（河原の近く）にあたり、近世期ではあるが街道沿いでもある。墓から北西方向を臨めば、河原の向こうには玉川が流れ、視線の先の山並には、古くから信仰の対象とされる長野山がそびえ立つ。中世の人びとにとって、このような景観地に墓を造ることは、ごく自然のことだったのかもしれない。

《謝辞》小稿が成るにあたり、陶器の発見者である佐々木チヨさんには、聞き取りにご協力いただき、また下記の方々からも直接的なご教示・協力をいただきました。あわせて御礼申し上げます。  
村木二郎（国立歴史民俗博物館）／山口博之（山形県埋蔵文化財センター）／山崎文幸（大仙市教育委員会文化財保護課）／今野沙貴子（秋田県埋蔵文化財センター）

註1 藤田秀司「中仙町の文化財（経甕）」『中仙町役場ホームページ』

[http://www.hana.or.jp/nakasen/rekisi/bunka/bun\\_05.html](http://www.hana.or.jp/nakasen/rekisi/bunka/bun_05.html)

註2 水木田の陶器については、註1文献以外にもう2つの記述が見られる。これらの三者では、陶器の寄贈・出土時期が微妙に異なる。

①『中仙町史 通史編』には、「原始時代の中仙」という章があり、その中の「古墳墓」という項目には次のような記載がある（原文縦書）。

「昭和三十一年五月中仙町長戸呂の佐々木チョ子氏が水木田の牛蒡畑より掘り出した須恵の骨壺をもつ古墳が発掘されてから数か月後公民館に届けられた。すぐ現地に行ってみたが残念ながら埋葬施設や封土の大半が掘りかえられ遺構を確認することはできなかった。遺跡は平地の中の一寸高くなって東は田圃につづく砂質壤土の野菜畑で、遺構からともに出土したという多数の木炭と、径二〇ミリメートルぐらいの川原石六個が掘り上げられていた。」

中仙町郷土史編さん委員会1983「原始時代の中仙」『中仙町史 通史編』

②遺物は現在、中仙公民館長野分館資料室に展示中であるが、資料の傍らに「中仙町文化遺産所在一覧」（平成5年3月17日）が添えられており、その解説には次のような記載がある（原文縦書）。

「昭和三十年長戸呂佐々木チョ子氏寄贈 昭和二十八年頃右佐々木氏の牛蒡畑から発掘石と木炭で包まれていたというこの須恵器甕は口縁が外反し、ロクロ整形をなす胴部は叩によって整形され叩板の文様がきれいにしている 片口浅鉢を蓋として使用していた これらの遺物と出土状況から中世初期の経甕と考えられる。」

その他に、藤田秀司1989「中仙の塚」『中仙町史 文化編』には、「長戸呂出土経甕（長野公民館蔵）」として壺の写真が掲載されている。

註3 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所2001「第117次調査の概要」『弘田柵跡 第117・118次調査概要』／高橋 学2003「仙北町弘田柵跡－中世前期の墓域－」『中世出羽の諸様相』東北中世考古学会秋田大会資料集

註4 秋田県1980『秋田県総合地質図幅 角館』／秋田県教育委員会1986『角館街道』歴史の道調査報告XIV

註5 秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』／秋田県教育委員会1987『秋田県遺跡地図（県南版）』

註6 秋田県教育委員会2005『小島田Ⅰ遺跡』秋田県文化財調査報告書第385集

註7 仙北町教育委員会1999『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第3集

註8 大仙市で遺物保管。須恵器系陶器壺（完形、13世紀代、大畑窯跡群産か）。

註9 千畑町教育委員会2004『中屋敷Ⅱ遺跡』千畑町埋蔵文化財調査報告書第6集

註10 内田武志・宮本常一1978「月の出羽路（仙北郡八）」『菅江真澄全集』第七巻 未来社

註11 吉岡康暢1994「消費資料の型式分類と編年」『中世須恵器の研究』吉川弘文館

註12 南外村教育委員会1981『大畑窯跡発掘調査報告書』／南外村教育委員会1992『大畑・松山腰窯跡発掘調査報告書』／高橋 学2003「大畑・松山腰窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院／小松正夫2003「大畑窯跡・松山腰窯跡－秋田県南外村中世窯跡群－」『中世出羽の諸様相』東北中世考古学会秋田大会資料集

註13 村木二郎氏の教示による。また鎌田 勉氏は、「壺の底部穿孔は蔵骨器のみの現象」と明記している。鎌田 勉1997「岩手県内の経塚の検証2－経塚の意向と墳墓の遺構－」『岩手考古学』第9号

註14 古澤 悟2001「穿孔骨蔵器にみる古代火葬墓の造営理念」『日本考古学』第12号 日本考古学協会

註15 佐藤禎宏1977「酒田市城輪柵跡出土の壺（1）」『庄内考古学』第14号

註16 秋田県教育委員会1991「小出Ⅰ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』

註17 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所2005「第125次調査の概要」『弘田柵跡 第125～128次調査概要』

- 註18 酒井忠一・川崎利夫1963「山形県飽海郡遊佐町宮山坂火葬墓群について」『考古学雑誌』49-3
- 註19 岩手県教育委員会1981「西根遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X（金ヶ崎地区）』
- 註20 中世墓資料集成研究会2004『中世墓資料集成－東北編－』による。
- 註21 山形県内の事例は、山口博之・稲田奈津子2004「山形県」『中世墓資料集成－東北編－』中世墓資料集成研究会を参照した。
- 註22 註3文献／秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所2004「第6次5年計画調査の総括」『弘田柵跡 第122～124次調査概要』／なお第1図B地点（第126次調査区）では、15世紀末から16世紀段階の土葬墓が2基検出されている。（秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所2005「第126次調査の概要」『弘田柵跡 第125次～128次調査概要』
- 註23 大仙市教育委員会文化財保護課からの情報による。
- 註24 新野直吉・遠藤 巖（編）1980『角川日本地名大辞典5 秋田県』角川書店
- 註25 石井進・萩原三雄（編）1993『中世社会と墳墓』名著出版など
- 註26 斉藤 忠1993「中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群遺跡」『一の谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会



遺跡近景（南→）

中央の道路は近世角館街道、街道の右手が遺跡

遺跡の北西側には玉川を挟んで長野山などの信仰の山々が連なる